ハンス＝ジョージ・メラー
吉澤夏子 訳

ラディカル・ルーマン
THE RADICAL LUHMANN

必然性の哲学から偶有性の理論へ

ルーマンより面白い「ルーマン入門」

現代の最も難解な社会学者、ニクラス・ルーマン。
彼の企図した西洋思想史におけるパラダイム・シフトを、
ヘーゲルと対照しつつ描ききり、その核心にあるラディカリズムを
説得的に提示した、読んでおもしろい「ルーマン入門」。

新曜社

ハンス＝ジョージ・メラー
吉澤夏子 訳

ラディカル・ルーマン
THE RADICAL LUHMANN

必然性の哲学から偶有性の理論へ

新曜社

Hans-Georg Moeller

THE RADICAL LUHMANN

Copyright © 2012 Columbia University Press
This Japanese edition is a complete translation of the U. S. edition,
specially authorized by the original publisher,
Columbia University Press, New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

ラディカル・ルーマン ＊ 目次

はじめに　7

Ⅰ　序論

第一章　トロイの木馬――ルーマンの隠された（とはいえそれほど隠されてはいない）ラディカリズム　18

第二章　彼がこれほどの悪文を書いた理由　28

Ⅱ　哲学から理論へ

第三章　第四の侮辱――ヒューマニズムの拒絶　38

第四章　必然性から偶有性へ――哲学のカーニバル化　58

第五章　プラトンへの最後の脚注――心身問題の解決　87

第六章　エコロジー的進化――社会創造論への挑戦　112

第七章　ポストモダン的現実主義としての構成主義――差異の教え　127
第八章　ユートピアとしての民主主義――政治の脱構築　143
第九章　結論――望みでもなく怖れでもなく　166
補　遺　ニクラス・ルーマン――知の歩み　188
注　212
訳者あとがき　236
文献の短縮表記　244
事項索引　250
人名・著作索引　252

装幀――難波園子

凡例

一　原注は（1）、（2）、……で示し、巻末に一括して記した。また原注における〔　〕は訳者による補足である。

二　訳注は＊で示し、奇数頁左端に記した。

三　原著でイタリックが用いられている箇所は、傍点を付した。

四　原著で‘　’が用いられている箇所は、原則として「　」を用いたが、一部傍点を付した箇所もある。

五　原著におけるルーマンあるいは他の社会学者・哲学者の著作（ドイツ語）からの引用については、内容の確認のため適宜ドイツ語の原典および日本語訳を参照したが、訳出は原則として原著の英語から直接行なっている。

はじめに

ニクラス・ルーマンの社会システム理論は、現代社会のありようを理解するための、もっとも先進的かつ適切で、広く応用できる考え方をもたらしてくれる、という点で際立っている。一つ具体的な例を挙げよう。一九九七年に出版されたルーマン最晩年の論考「グローバリゼーションか世界社会か?近代社会をどのように理解すべきか?」において、彼はこの問いにきわめて理路整然と答えているだけではなく、後に（二〇〇八―〇九年）大きな財政危機へといたることになる経済発展の輪郭を、驚くべき正確さで描いている。[1]

ルーマンはそうした危機そのものを予言したのではない。ただそれを可能にする社会的文脈をうまく説明することに成功したのだ。なぜそんなことができたのか、それはルーマンの理論的アプローチが、（彼によれば）幸福と連帯というユートピア的理想にずっと関心を寄せてきた主流の政治理論からラディカルに離脱していたからだ。ルーマンは次のように宣言する、「私たちは最終的に、人間の幸福などない社会、そしてもちろん上品な趣味も連帯も生活水準の類似性もない社会を甘んじて受け入れなければならない。こうした願望に固執すること、市民社会やコミュニティといった

古びた名ばかりのものを今さら甦らせて、そんな一覧表を復活させ補完することに、なんの意味もない」と。彼は、社会理論家たちに、隠れた「理想主義者」や道徳主義者を気どることをやめよと訴え、こう言う。「社会学者は、近代の俗流聖職者の役割を担ってはならない」。ルーマンによれば、多くの社会思想・政治思想にみられる道徳主義的傾向は、理論的な退化からくるものだ。社会理論の「俗流聖職者たち」は、未だに社会を十八、十九世紀の大先生たちの視点で考えている、つまり社会は抑圧するものと抑圧されるものに二分されているという社会階層の視点で考えているのだ。彼はこう書いている、「階層に目を向ければ、不正や搾取、抑圧……に気づくことになろう。そしてそれを矯正する工夫をみいだそうとする。少なくとも批判や抵抗のレトリックを刺激するような規範的施策や道徳的禁止を打ち立てようとするだろう」[2]。ルーマンは、こうしたレトリカルな態度からラディカルに距離をとることを提唱する。その根底には、社会は階層的分化から機能的分化へと変化してきたという知見がある。彼はこう宣言する。「他方、機能的分化に目を向ければ、私たちの叙述は――システムごとにさまざまに異なるその特異な点において、高度な感受性と刺激性に結びついている――機能的システムの自律性、つまりその高度な中立性へとさし向けられる。こうして、私たちはそこに、頂点も中心もない社会、すなわち進展はしていくがそれ自体統御不能な社会というものをみいだすことになる」[3]。

俗流聖職者の視点からラディカルな理論家の視点へ、この転換こそ私が本書で探求するものだ。あるいは、ルーマン理論の間違った解釈に対抗しようとするものだ、と言い換えてもよい。マイケ

ル・キングが言うように、そうした解釈は「ルーマン理論が導くラディカルな本性とパラダイムを認識[4]」しそこなっているからだ。しかしまず、一九九七年に、ルーマンの死後ずいぶん経ってから起きた財政危機の社会的条件を彼がどのように描いていたか、に立ち返ってみよう。

機能的分化に基づくグローバル社会では、「国際的（インターナショナル）」とは、実際にはもはや二国間あるいは複数国間の関係ではなく、全体システムの政治的・経済的諸問題のことである。徹底的に脱地域化された世界社会では、「すべての内部境界は、サブシステムの自己組織化しだいで決まるのであり、歴史上の「起源」や包括的システムの性質や論理で決まるわけではない」。この結果、「世界社会は、さらに高度な複雑性の段階へと達した」といえるような状況がもたらされる。そこには「より高度な構造的偶有性（コンティンジェンシー）や、より予期不能・予測不能な変化（これをカオスとよぶ人々もいる）、そしてとくにより内的に結びあわされた依存性と自立性がみいだされる。つまり、因果的な構築（や計算や計画）は、中心的な、ゆえに「客観的な」観点からはもはや不可能だということだ[5]」。

こうした混沌とした複雑な社会のなかでは、「機能的システム内の構造的発展が相互に両立可能であるという疑似宇宙論的保証は、もはやない」。それは、たとえば「きわめて効率的な現代医学は人口学的な結果をもたらす」ということ、すなわち医学の「進歩」は、高齢者人口と若者人口の不均衡や増大する保険医療費といったあらゆる種類の社会的・経済的諸問題を引き起こす、ということだ。同様に「国際金融市場の新たな集中やそれにともなう生産、労働、貿易の周辺化が起き、経済上の担保が実際の資産や一級の債務者から投機的思惑それ自体へと移行すると、仕事が減り、

政治家は（市場を介さない？）仕事を約束するように仕向けられる。つまり、経済のヴァーチャル化、普通の商品よりも金融商品を焦点化する経済への移行は、（一部の人に）莫大な富を生みだしたが、経済と、たとえば下部構造（インフラ）、生産手段、労働、法システムとの、そして政治との伝統的な結びつきを侵食することになった。こうして、社会は、「予測できない結果に対して安全とリスクを同時に最大化するような新しい金融関連商品を擁する金融市場の不安定さ」に新たに直面することになる。言い換えれば、「経済システムは、その安全性の基盤を、資産や（国家や巨大企業のような）信頼に値する債務者から、投機的思惑それ自体へと変えたのだ。資産を維持しようとする者は大金を失い、財産を維持しかつ増殖しようとする者は日々その投資先を変えなければならないだろう。彼は新しい金融関連商品を利用するか、あるいは彼のかわりにそれを引き受けてくれる多くのファンドのどれかをあてにしなければならない」[6]。ルーマンには、こういったことのすべてを「搾取」といった伝統的な語彙や、「強欲」といった道徳主義者のカテゴリーで説明することはできない。

経済の金融部門におけるこうした展開とそのほとんど悲惨な結果――たとえばアイルランドの教育システムの場合――は、「私たちは「歴史以後」の段階にいるのではなく、逆に結果を言い当てることなどできない荒れ狂う進化の只なかにいるのだ」[7]というルーマンの言葉の正しさを、はっきりと示している。こうした状況で、過去三、四百年にわたって哲学者たちによって展開されてきた政治理論の言葉にしがみつくことは、有望な戦略だとは思えない。ルーマンは言う、「現在、社会

という概念をめぐるまだ解かれていないさまざまな問題が、理論的進歩を妨げているように思える。善という考え方、あるいは少なくともより良い社会という考え方が、この領域を依然として支配している。社会学者たちは、理論に関心があるのに、新しい迷宮に足を踏み入れようとはせず、見返りが減りつつあるのに、古い迷宮を探求しつづけている。しかし、マスメディアによってつくり上げられた問題のより良い解決を探し求めるのではなく、まず「何が問題か」を問うことのほうが、価値があるだろう[8]」と。

ではいったい何が問題なのか。またさらに問うなら、それをもっとよく理解するために、私たちはどのようにものの見方を変えなくてはならないのか。以下の各章では、哲学から理論へという、現代世界への新しい視座を切り開くルーマンのパラダイム・シフトがどのようなものであるかを明らかにする。

まず、いかなる社会システムの下でルーマンの著作が生みだされたのか、つまりドイツの学問の現場が、二十世紀最後の二、三〇年間どのようなものであったのか、を描きだすことから始めよう。ルーマンは、「支配から自由な討議」(herrschaftsfreier Diskurs)に基づく社会というハバーマスの学説が優勢だった当時の状況のなかで、それに異議を唱えたにもかかわらず、いやおそらく異議を唱えたからこそ、成功することができたのだ。ルーマンは、この規範的な政治哲学に対して、一つのラディカルな選択肢を呈示した。ルーマンは自分の理論を、ひとたび敵陣の内部に入れば内側から敵を壊滅させてしまう破壊的なトロイの木馬だと考えている。私が主張するのは、この脅威を隠

すためにルーマンがとった戦略の一つが、ときに難解になってしまうその文体だった、ということだ。ハバーマスや当時学界エリート層に属していた人々が用いる専門用語（ジャーゴン）を受け入れることで、ルーマンは彼らのトロイへと入っていくことを許されたのだ。

こうした予備的考察のあと、ルーマンの仕事における哲学から理論への転換だと私が考えるものについて、そのさまざまな側面をみていく。ルーマンは、近代西洋哲学の人間中心主義的な伝統と袂を分かつ。他のいかなる人文科学にもまして、哲学は――とりわけ政治哲学・社会哲学では――人間を「万物の尺度」だとみなしてきた。人間の慢心に対するルーマンの「第四の侮辱（インザルト）」とは、社会理論の中心に位置する「人間」という概念を否定することにある。彼は、天文学（コペルニクス）、生物学（ダーウィン）、心理学（フロイト）においていち早く起きた非・人間中心主義につづいたのだ。この侮辱が、先達者たちとまったく同じように、多くの人々にスキャンダラスなものだと思われたことも、そのせいで、どこかのイデオロギー的陣営では、ルーマンをずっと好ましからざる人物だとみなしていたことも、驚くべきことではない。

第四章「必然性から偶有性へ」では、ルーマンとヘーゲルの比較を行なう。私の考えでは、ヘーゲルはルーマンに影響を与えたもっとも重要な哲学者である。しかし、この二人の偉大な体系の思想家の関係はかなり曖昧だ。私は、ルーマンの試みを、ヘーゲル哲学のヘーゲル的止揚だと考えている。ヘーゲルが哲学による宗教の止揚を試みたように、（それを一段高いレベルに上げて、克服し、保存する、という三重の意味で）ルーマンは理論による哲学の止揚を目論んだのだ。ヘーゲル

にとって哲学の営みは、偶有性を必然性へと変容させることにある。ルーマン理論がめざすのは、必然性を偶有性へと変容させることだ。

第五章「プラトンへの最後の脚注」では、理論へのルーマン的転換という偉業のうちで、もっとも明白であるにもかかわらず、まったく見逃されている（と私が考える）ことについて、その輪郭を描こう。それは、伝統的な西洋哲学における中核的な問題、すなわち心身二元論の解決である。デカルト以降、彼への否定的反応において、この強固な二元論を扱う試みは、大体において、身体を解放するといった方法で精神と身体を調停しようとするものだった。心‐身を語るときのこの偏見のせいで、「既存の枠組みに囚われずに」考えることも、この二元論に対してさらにラディカルな選択肢を展開することもできなくなった。ルーマンが説得的に示すのは、知性的なものと物的なもののほかに、少なくともう一つの次元、コミュニケーションという次元があるということだ。この第三の次元によって、ルーマンは、伝統的な実体の二元論をさまざまなシステム領域間における構造的カップリング*の機能理論に置き換えることができたのである。

第六章では、ルーマンの社会理論への（ハバーマスの造語を使うなら）「メタ生物学的」なアプローチについて論じる。それによって、ルーマンは近代の主流の社会思想・政治思想と再び袂を分

*二つのシステム間の相互依存性を表わす用語。二つのシステムはそれぞれオートポイエーシス的であり操作的に閉じているが、それでも相互に繋がっていることを説明するためにルーマンが編み出した重要な概念。

かつことになる。啓蒙時代およびそれ以後の哲学は、市民社会とそれを構成するとみなされていた個人を、自律的な行為体として見るようになった。自由意志、合理性、責任によって、人間は社会を形成し「自ら招いた未成年状態」から脱することができる。こうして人間は自らを創造するものとなる。人間は、自らの運命と自らが生きる社会の究極の支配者である。しかし進化論的にみれば、そんな自己統御や自己支配など幻想にすぎない。システム論的にみれば、社会的世界は自然と同様、いかなる知的な設計者も自律的な統治者も入りこむ余地のない、またその必要もない、多くの複雑なシステム－環境関係から成り立っている。

第七章「ポストモダン的現実主義としての構成主義」では、「ラディカル構成主義者」としてのルーマンの自己アイデンティティについて論じる。私が指摘したいのは、構成主義と現実主義は本質的に矛盾するものではない――とくにルーマンの場合には――ということだ。ルーマンの構成主義は認識上の構成主義である、つまり、認識論的なものである。認識上の構成とは、現実が出現するための「可能性の条件」である。つまりそれは存在しないものから存在するものを区別し、それによって、現実的なものを現実化するのである。このようにして、認識上の構成はドイツ観念論を根源的に刷新し、存在論と認識論の関係を逆転させた。ルーマンにとって、現実は経験のアプリオリな条件ではない。そうではなく、彼はこう主張する、認識の機能は「オートポイエーシス的に」自らを生みだし、それによって――さまざまな仕方で――現実を構成することができるのだ、と。現実は、認識の自己生成・自己構成の効果として、同一性ではなく差異の上に成り立つ、そしてこ

れが現実を、まさに現実的にするのである。

第八章では、ルーマンが民主主義（デモクラシー）をどのように理解しているのかを分析し、より具体的に社会統御の限界を精査する。ルーマンは、民主的参加というものに疑問をもっていた。彼によれば、人民による支配という民主主義の考え方は、ユートピア的な夢物語にすぎない。それは現代社会の政治の機能を十分に意味あるものとして描くことはできない。社会はいかにして民主的なものへと変わりうるのか、そして最終的に人々はいかにして自らを支配するようになるのかを考察するのではなく、ルーマンが提唱するのは、象徴的な物語としての民主主義――それによって政治システムは正統性を調達することができる――という機能主義的な考え方である。逆説的だが、社会をより民主的にしようとする試みは、実際は、民主的な政治を危機に陥らせることになるかもしれないのだ。ルーマンの政治的ラディカリズムは、したがってイデオロギー的なものではなく、反イデオロギー的なものである。

最後に――おそらく不適切な問いかもしれないが――、ルーマンのラディカリズムは結局私たちをどこに連れていくのか、あるいは、ルーマン的な社会への態度は、いや生への態度とはどのようなものなのか、という問いに答えよう。この態度は、謙虚さ、アイロニー、平静さの陶冶として規定されうる、と私は考えている。

補遺では、ルーマンの生涯とその理論をざっと概観することになる。

アン・R. ギボン、アンドリュー・ホワイトヘッド、ジェイソン・ドックスティダーには私の英

文の誤りを訂正し、多くの修正点・改善点を指摘していただき、たいへん感謝している。ブルース・クラーク、マイケル・キング、エレーナ・エスポジトには、本書の草稿に目を通していただき、丁寧なコメントおよび批判をいただくなど、多くを負っている。コロンビア大学出版局のウエンディ・ロックナーには、この「ラディカル」な企画を引き受けていただき感謝している。またアイルランドのコーク大学、芸術学部、ケルト研究所、社会科学部には、本書の刊行のためにご尽力をいただき感謝している。

I

序論

もしルーマンの社会理論が、私の考えどおり、現在手にできるもっとも優れた現代社会の記述・分析であるなら、ただこう問えばよい。一般人、専門家を問わず、大半の人々が、このことに気づいていないようにみえるのはなぜなのか、またルーマンの名声が、ホッブズやマルクス、フーコーやハバーマスにはるかに及ばず、またあまり知られてさえいないのはなぜなのか、と。[1]

ルーマンが彼らに比べて、とりわけ北アメリカで無名である第一の、もっとも直接的な理由は、次章で私が述べること、つまりときに「眠くなるような」その文体にあるといってよい。[2] 北アメリカの読者のなかにルーマンの文章をいささか不快に思う人がいるのは偶然のなせるわざだが――なぜなら、ルーマンは結局ドイツ語でドイツ語を解する読者に向けて書いているのだから――、一方で彼は、母国ではその難解な文章がある利点をもたらすことに当然気づいていた。このような文体は、彼もまたその一翼を担っていた現代社会学の言説によく適合していたのである。故郷で、ルーマンはドイツ大学人の共通言語を完璧に自分のものにすることによって、彼を理解しない人々の尊

敬を勝ちとる一方、同僚たちに警戒心を抱かせることもなかった。こうして彼は、もしそうでなければ、六八年以後のドイツの学界から徹底的に排斥される恐れなしにはけっして言えるはずのなかった多くのことを実際に言うことができたのだ、と私は思う。ルーマンの理論には、実に多くのラディカリズムが含まれているので、総じて控え目で近づきがたい言葉、すなわち無骨なトロイの木馬のなかに、それを隠しておく必要があったのだ。アメリカの「自由主義陣営の権威たち」はルーマンを退けるか、端的に無視すればよかった――ルーマンは特にそのことを気にしなかった、なんといっても彼はドイツの大学の教授だったのだから。しかし、（ナチスの悲劇以降）イデオロギー的にあまりに用心深くなりすぎている身近な学界に対しては、自分がそれほどあからさまに衝撃を与えることはない、と請け合う必要があった。ゆえに、彼はその難解な文体を意識的に洗練させていったのではないだろうか。私が思うに、それは彼の理論に潜在するいくぶん刺激的な部分を、（ニーチェ的な意味で）あまりに弱くてそれを直視することのできない人々の目から隠すためだったのだ。

本書の第一の目的は、ルーマン理論のこうしたラディカルな側面を前面に押し出すことにある。私が知る限り、ルーマンはこれから私が述べようとしている問題をうまく隠していた。彼の理論の受容は、だいたいその仕事のあまり刺激的でない部分に集中している。彼は保守的な論客というレッテルを貼られてきたが、ラディカルだと言われることはほとんどなかった。本書は、ルーマンがラディカルであることを正当に評価する試みである。